

写真鑑賞場面における相互行為分析

写真鑑賞場面における相互行為分析

—— 地域の歴史写真集を介した夫婦のコミュニケーション ——

中 塚 朋 子 (奈良女子大学社会連携センター)

櫻 井 裕 子 (奈良女子大学大学院人間文化研究科)

山 内 美 月 (奈良女子大学大学院人間文化研究科)

檜 田 美 雄 (徳島大学大学院リソ・アート・アンド・サイエンス研究部
徳島大学総合科学部併任)

1 はじめに

「写真」は、人にある時点の記憶や場所について喚起させたり、想起させる効果を持つ。連続性が維持される映画やビデオとは異なり、写真は断片的なイメージを残すものである。そうした断片的なイメージが、写真を見る者に解釈の余地をあたえている。古い町並みや人びとの暮らしを映し出す写真は過去の経験や出来事を思い出させ、新しい状況を映し出す写真はそこに差異や変化を見出す語りを生み出す可能性がある。その解釈は、ともに眺めている者との関係性や、写真に付与される説明や解説によっても異なる。

今回分析を加えたのは、一組の夫婦が、自分達の住んでいる地域の変遷の写真を鑑賞する場面である。そこで行われている相互行為は、身近な地域の歴史写真集という外部の情報源を介しているという特徴を持っている。その方法は、録画データをもとに、写真鑑賞する場面について相互行為分析を行うというものである。

社会学の分野において、写真をエスノグラフィックな資料や記録として活用する方法は盛んに行われてきた。また、雑誌やポスターなど、写真が与えるマスメディアとしてのマクロ的なコミュニケーション効果についてはメディア研究の分野で様々なかたちで蓄積されている。しかし、本研究のような写真そのものを媒介とした対面的なコミュニケーションについて調査・分析した研究は国内・海外をみても数多くない。その意味で、この分野において、

本研究は先駆的な研究となるといえよう。

本研究の目的は、時代を越えて写し出された身近な地域の歴史写真を鑑賞するにあたり、夫婦の間でどのようなコミュニケーションが行われているのかを明らかにするものである。写真を見ながら二人の意見が一致しないというやりとりが起こるのだが、その前後のデータを提示しながら分析をくわえていく。とりわけ、説明に対する承認や同意の仕方、写真と参照される関係にある記憶やキャプションなど情報源の関係性、会話におけるトラブルとその修復、議論のあとに起きた話題の転換について検討していく。そして、相互行為全体にわたる考察結果として、相互行為を通して達成される「知識の提供者」とその「聞き手」というその位置取りについて議論する。

2 調査概要

2.1 調査の対象と方法

本調査では、一組の夫婦の間で行われる写真の鑑賞行為の場面を分析する。今回、被調査者である夫妻には、「写真を介したコミュニケーション」というテーマで調査・分析することを説明し、写真を見ながら二人で会話をする場面の撮影協力を依頼した。

本調査で用いた写真集は、2008年10月に発行された『奈良市今昔写真集』（樹林舎）である（図1）。写真集に掲載されている350枚もの写真は、今と昔の様子を対比させながら奈良の町並みや生活の移り変わりを示している¹⁾。そこで被調査者に、奈良市の中心市街地に長年にわたり居住している70歳前後の夫妻を選定した。夫妻に



図1 『奈良市今昔写真集』
表紙

は、ビデオ撮影時に初見で写真集を鑑賞してもらうことにした。

ビデオ撮影は、2009年の2月5日の午後に、被調査者の自宅で行われた。調査者3名は、調査の目的や内容について被調査者に説明し、撮影の許諾と研究を目的としたデータの使用について承諾を得ている。

当日は、約2時間程度の撮影を行った。(1)前半に、夫妻のあいだで行われる写真の鑑賞場面を撮影し、(2)後半は、写真集を鑑賞した感想を夫妻に尋ねるインタビュー場面を撮影した。なお、夫妻が写真集を鑑賞している間、調査者3名は一時退室している。今回は、夫妻のあいだで行われた写真の鑑賞場面の約2分半を分析する。

2.2 撮影場面の様子

撮影は、被調査者の自宅の居間で行われた。写真集を広げ、テーブルの角を挟むかたちで夫妻は座っている(図2)。写真集は、二人が同程度に見える位置に置かれている。

夫妻は、写真に付随する解説文(キャプション)を読みながら順を追ってページをめくり、終始、和やかに会話を進めている。

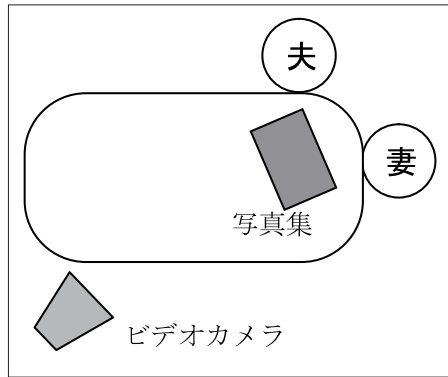


図2 夫妻、写真集、ビデオカメラの位置

2.3 分析の視点

ここで、分析の視点を簡単に紹介しよう。

本稿で取り上げるデータは、明治期から現在までの市役所の庁舎の写真が複数掲載されているページで、その変遷について二人が会話をしている場面である。データは、当該ページを含む前後のページの会話から提示する。

夫婦は、写真を見ながら建設や移転を繰り返している市庁舎の変遷を話題にしている。このとき夫は、市役所が火事で一度焼失したという昔の出来事

を妻に話す。しばらく二人は市役所に関する話を続けているのだが、市庁舎が焼失したという事実について、二人の間で意見の食い違いが生じてくる。

本稿では、そこで起きた会話上のトラブルや二人の相互行為に注目し、写真鑑賞の関連について分析する。そこでは、主に記憶情報に依拠した夫とキャプション情報に依拠した妻の発話の相互行為を追っていくことにする。

2.4 写真について

分析の前に、写真について説明しておく。

「記憶に残る建物群」として紹介された「奈良市役所」のページには、5枚の写真が並べられている（安彦監修 2008：44-5）。本稿では、分析の都合上、これらの写真にそれぞれ1から5までの通し番号を振っておく（図3）。また、写真や写真に添付されているキャプションが相互行為に重要な役割を果たしていることから、それらを資料²⁾として提示する（資料1）。

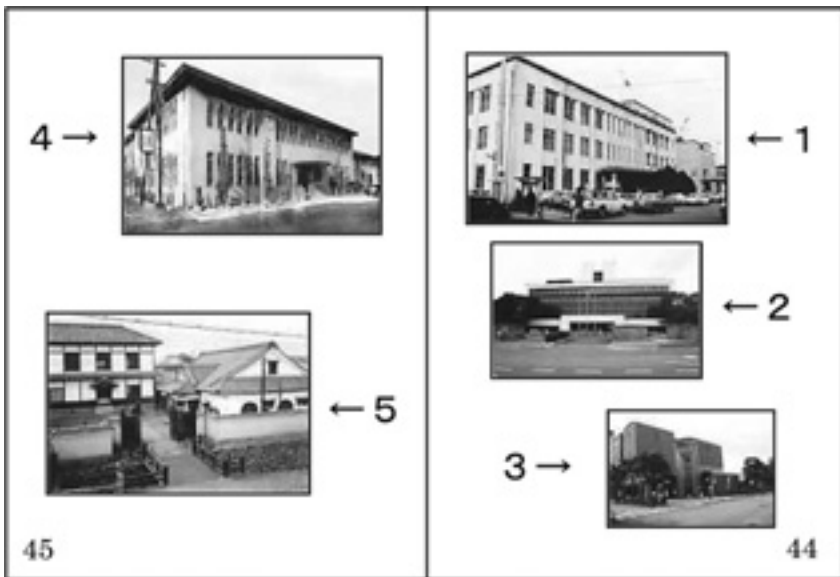


図3 写真の配置

写真鑑賞場面における相互行為分析

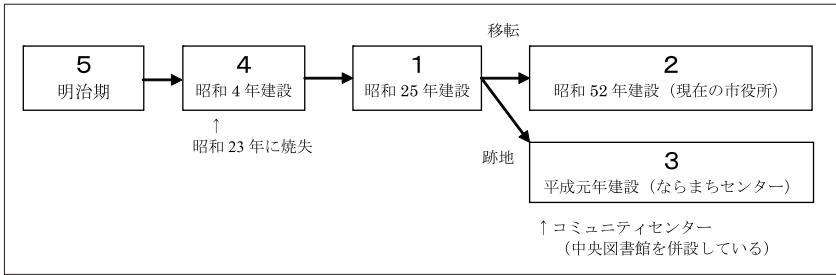


図4 奈良市役所庁舎の変遷

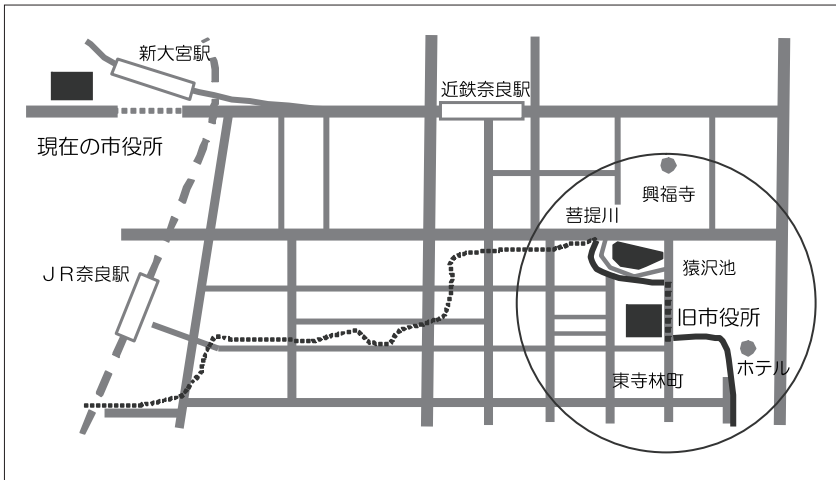


図5 周辺の地図

市庁舎の変遷についてだが、年代順に並べると写真5→写真4→写真1→写真2の順となる（図4）。写真3の建物は、市役所が移転したその跡地に建設された中央図書館併設のコミュニティセンターである。実際に火事で焼失したのは、写真4の建物である。

また、会話の中で周辺の地理について述べられるため、簡単な地図を載せておく（図5）。



焼失前の奈良市役所
昭和初期
粟崎林町

市庁舎の老朽化がひどく、手狭になったため、昭和4年11月、本造二層建ての市庁舎と議事堂に全面改装。庁舎前の青銅像は焼失にきれて道路の一部となった。この庁舎は昭和23年11月に焼失した。

(出)『奈良市史』巻4)



明治期の奈良市役所庁舎
明治31年ころ
粟崎林町

明治31年2月の市制施行当時の奈良市庁舎と議事堂。写真右側に写る舞生庵南蔵屋敷を、奈良市役所、ついで奈良市庁舎として使用した。庁舎の前に青銅像が置かれていた。

(複製・史料公開) 注：奈良大学関係館蔵

奈良市役所

昭和 50 年ころ

奈良市役所
Nara City Hall



昭和 8 年建築の市役所が焼失したため、昭和 35 年 11 月に新しく建てられた鉄筋 3 階建ての市庁舎、37 年 5 月に現庁舎に移るまで 39 年近く使われた。
(提供：奈良市役所)



現在の奈良市役所

平成 30 年

二条大路南 1 丁目

市制施行 80 年にあたる昭和 32 年 2 月、市庁舎を平城宮左京三盛二地に新築した。もと市立三宮中学校的跡地。民間ビルには平城宮復元模型がおかれ、平城京の景観を再現しようとした。この移転で奈良のまちは西に大きく伸びた。

現在▶



市庁舎移転にともない平成元年 8 月、跡地に、なまらまちセンターが建設された。市民ホール、多目的ホール、企画展示コーナーを設けるなど、なまらまちの町並み保存と活性化の拠点とした。6 月に奈良市立中央図書館も移設された。

2.5 データ

以下は、撮影したビデオデータをもとに作成したトランスクリプトである³⁾。

- 01 0:17:08 妻 : °次いきましょ°. 奈良公園の鹿, 鹿は同じやね,
02 0:17:10 夫 : [hahahaha
03 0:17:12 妻 : [今も昔もね!
04 0:17:13 夫 : そや, 昔の鹿, 痩せとってんで,
05 0:17:15 妻 : <あ, ほんと. そうか, ↑栄養がよくて. ふ::
ん, ほんと, 痩せてた↑ん昔の鹿は.
06 0:17:26 夫 : うん. ()°昭和42年°, 昭和43年. ↑昭和42年
ね, ((写真のキャプションを読む))
07 0:17:28 妻 : [そうやね. 戦後, 人間と一緒にでね. <<ページを
めくる>>
08 0:17:29 夫 : [いやもう.
09 0:17:30 妻 : 細かってんやね. そう, 人間も (0.1) 太らない
んやから.
10 0:17:37 夫 : ↑昔の市役所, これや. ((写真1を指差す))
11 0:17:38 妻 : あ::, は::は::は::あ::ここにあったんね. あ
の, 興福寺::やなくて=猿沢池のそばにね
(0.1). あれやね.
12 0:17:46 夫 : うん.
13 0:17:46 妻 : うん.
14 0:17:47 夫 : いっぺん, ↑木造↓やってん. [で, あれ火事で
↑焼けちゃってんや.
15 0:17:48 妻 : [あ::=
16 0:17:50 妻 : = [あ::, そう.
17 0:17:50 夫 : [それを, これ三階建てたんや.
18 0:17:53 妻 : 何↑年(に) 建ったんかしら?

写真鑑賞場面における相互行為分析

- 19 0:17:54 夫 : これ, 昭和: (0.1) 4 年の建築で焼けてね, 25 年に ((写真 1 のキャプションを読む))
- 20 0:17:59 妻 : あ: :, そうか: :hun.
- 21 0:17:03 夫 : ほんで, (.) いっぺん建てはってんけど, また↑ それ52年には (2.0) な.
- 22 0:18:05 妻 : うん, 向こうに行ったわけやね. 大宮の方へね. 狭くなったし.
- 23 0:18:10 夫 : それで, [これこれ ((写真 4 を指差す))
- 24 0:18:11 妻 : [°うん°, 焼失前の: これ, 木造やってんやね.
- 25 0:18:13 夫 : °そうそうそう°.
- 26 0:18:14 妻 : 今, 図書館になってる. 中央公民館(.)中央じゃないのか. あれは.
- 27 0:18:19 夫 : あれは: :東, (中心街?), 寺林.
- 28 0:18:24 妻 : う: ん, そうか°そうか(.) hu↑hun°, これ, きたんやね. 奈良市も狭かってんやね. 学園前の方も人口が増えてきたからね. ((写真 4 を指差す))
- 29 0:18:32 夫 : 昔は人口 6 万ほどやってん.
- 30 0:18:34 妻 : °hun°, これやって, 明治期の奈良市役所って書いてあるよ.
- 31 0:18:37 夫 : それが, [焼けて, 焼けてしもてんや. ((写真 5 を指差す))
- 32 0:18:37 妻 : [明治: :
- 33 0:18:39 妻 : >↑これでしょ, 焼けたんは. <((写真 4 を指差す))
- 34 0:18:40 夫 : >違うの, これ((写真 5)) が焼けて木造になったの<
- 35 0:18:40 妻 : う↑: :ん, [これ焼けたて書いてる=

- 36 0:18:40 夫 : [((写真1)) これ、これは、20,20
(写真5を指差した後、1を指差す))
- 37 0:18:45 妻 : =>これ焼けたって書いてる。<昭和初期に=
(写真4を指差す))
- 38 0:18:50 夫 : [あ:::ほんと:::]
- 39 0:18:50 妻 : = [°これ、何て書いてあるんかな°
- 40 0:18:50 夫 : これ [4年 [えっと
(写真4と写真1を見比べる))
- 41 0:18:50 妻 : [これは、東寺林。[これもあったんやね。
これ川になってるよ、ここ。(写真5に写っている川を指差す))
- 42 0:18:50 夫 : ↑川、↑川 ((写真5を見る))
- 43 0:18:51 妻 : [堀になっているね ((写真5を指差す))
- 44 0:18:51 夫 : [↑川流れて、
- 45 0:18:52 妻 : うん、
- 46 0:18:53 夫 : それが：(0.2) 猿沢池の横の川に、猿沢池の横
流れてる
- 47 0:19:58 妻 : [今の↑交番の横=
- 47 0:19:58 妻 : [う：ん あ：
- 48 0:19:00 夫 : =だから、昔は↑川やったんや、
- 49 0:19:01 妻 : うん、あ：：
- 50 0:19:03 夫 : 今でも残ってるがな、
- 51 0:19:04 妻 : あ：：=
- 52 0:19:05 夫 : =痕跡あるがな、川ある、
- 53 0:19:07 妻 : ふ：：ん=
- 54 0:19:08 夫 : =猿沢池の方ぐるっとまわってる、
- 55 0:19:08 妻 : あ：：はあ：はあ：はあ：=
- 56 0:19:09 夫 : =それで、奈良市や、中にはいったんや、
- 57 0:19:11 妻 : あ：なるほどね、そうか、違うわね、[同じとこ

と違うわね.

- 58 0:19:12 夫 : [そうそう.]
59 0:19:16 妻 : ° ふ : : ↑ん°
60 0:19:17 夫 : だから, その源流は : : ↑ホテルの横の川(側?)
よ.
61 0:19:20 妻 : あ: そう, そうやね. [ふ : : ん
62 0:19:22 夫 : [それが, だ : っとまわっ
てきて, んであれ
63 0:19:24 妻 : 今も流れてるもんね=
64 0:19:25 夫 : =そうそう.
65 0:19:26 妻 : ≪ページをめくる≫
66 0:19:27 夫 : huhuhu (3.0) あ, 中央図書館.
67 0:19:30 妻 : 中央図書館.

3 分析

3.1 ページをめくる前の会話

まずは, ページをめくる前の夫婦のやりとりをみてみよう。ここで二人は, 「奈良公園の鹿」の写真について会話をしている(安彦監修 2008:42-3)。

- 01 0:17:08 妻 : °次いきましょ°. 奈良公園の鹿, 鹿は同じやね,
02 0:17:10 夫 : [hahahaha
03 0:17:12 妻 : [今も昔もね!
04 0:17:13 夫 : そや, 昔の鹿, 痩せとってんで,
05 0:17:15 妻 : <あ, ほんと. そうか, ↑栄養がよくて. ふ : :
ん, ほんと, 痩せてた↑ん昔の鹿は.
06 0:17:26 夫 : うん. () °昭和42年°, 昭和43年. ↑昭和42
年ね, ((写真のキャプションを読む))
07 0:17:28 妻 : [そうやね. 戦後, 人間と一緒にでね. ≪ページを

めくる≫

08 0:17:29 夫 : [いやもう.]

09 0:17:30 妻 : 細かってんやね. そう, 人間も (0.1) 太らない
んやから.



資料2 安彦勘吾監修, 2008,
『奈良市今昔写真集』
樹林舎, p.42-3

人から鹿せんべいをもらう鹿の写真を見て, 妻が「奈良公園の鹿, 鹿は同じやね」と述べている (01行目)。夫は「hahaha」と笑い, いったんは妻の発言を承認するかのような応答をしている (02行目)。ところが, 続けて発せられた「今も昔もね!」(03行目) という現在と過去を比較する妻の発言に対し, 夫は「昔の鹿, 痩せとってんで」(04行目) と述べ, 昔の鹿が今より痩せていたことを強調する。この発言は, 写真には映し出されていない彼自身の鹿に関する記憶にもとづいている。そして, 妻はその過去の事実を夫に確認するかのように「ふ: :ん, ほんと, 痩せてた↑ん昔は」と発言している (05行目)。

ページをめくってもなお妻は07行目「そうやね. 戦後, 人間と一緒にでね」と言い, 夫も08行目「いやもう」と鹿の話題を続けている。そして, 夫から提供された鹿に関する昔の情報は, 「細かってんやね. そう, 人間も (0.1) 太らないんやから」(09行目) という妻の発言によって承認され, この話題は終了した。

3.2 市役所の変遷を二人で話す場面

ページがめくられ、市役所の写真が現れる。二人はこれらの写真を見ながら市役所の変遷について話し始める。

- 10 0:17:37 夫 : ↑昔の市役所, これや. ((写真1を指差す))
- 11 0:17:38 妻 : あ:, は:は:は:あ:ここにあったんね. あの, 興福寺: :やなくて=猿沢池のそばにね (0.1). あれやね.
- 12 0:17:46 夫 : うん.
- 13 0:17:46 妻 : うん.
- 14 0:17:47 夫 : いっぺん, ↑木造↓やってん. [で, あれ火事で ↑焼けちゃってんや.
- 15 0:17:48 妻 : [あ:=
- 16 0:17:50 妻 : = [あ:, そう.
- 17 0:17:50 夫 : [それを, これ三階建てたんや.
- 18 0:17:53 妻 : 何↑年 (に) 建ったんかしら?
- 19 0:17:54 夫 : これ, 昭和: : (0.1) 4年の建築で焼けてね, 25年に ((写真1のキャプションを読む))
- 20 0:17:59 妻 : あ:~, そうか:~hun.
- 21 0:17:03 夫 : ほんで, (.) いっぺん建てはってんけど, また↑それ52年には (2.0) な.
- 22 0:18:05 妻 : うん, 向こうに行ったわけやね. 大宮の方へね. 狭くなったし.
- 23 0:18:10 夫 : それで, [これこれ ((写真4を指差す))
- 24 0:18:11 妻 : [°うん°, 焼失前の:これ, 木造やってんやね.
- 25 0:18:13 夫 : °そうそうそう°.
- 26 0:18:14 妻 : 今, 図書館になってる. 中央公民館 (.) 中央じゃないのか. あれは.

- 27 0:18:19 夫 : あれは::東, (中心街?), 寺林.
 28 0:18:24 妻 : う:ん, そうか°そうか (.) hu↑hun°, これ,
 できたんやね. 奈良市も狭かってんやね. 学園前
 の方も人口が増えてきたからね. ((写真4を指差
 す))
 29 0:18:32 夫 : 昔は人口6万ほどやってん.



夫 : ↑昔の市役所, これや.

妻 : あ:, は:は:は:は:あ:ここにあったんね.

図6 10行目の場面

「↑昔の市役所, これや」と, 夫は写真1を指差しながら発話する(10行目)。ここでは, やや音調が上がっていることから, 目の前にある写真と市役所についての彼の記憶が合致した様子が表れている。それに対し妻は, 「あ:ここにあったんね.あ,興福寺::やなくて猿沢池のそばにね(0.1)あれやね」(11行目)と発言し, 夫の指差している写真を自分の知識と照合しながら「昔の市役所」があった現在の場所を想起している。

さらに, 夫は市役所が木造だったこと, そしてそれが火事で焼けてしまったことを妻に話し始める。14行目の「いっぺん, ↑木造↓やってん. で, あれ火事で↑焼けちゃってんや」がそれにあたる。その際, 夫は「あれ火事で

↑焼けちゃってんや」と空中を見上げながら、自らの記憶にもとづいて発言している。一方、妻は15行目から16行目にかけて「あ：あ：そう」と夫の情報提供に対して、やや曖昧な応答をしている。

これら承認の遅延ともとれる反応が、次の妻による問いにつながっていると考えられる。「何↑年（に）建ったんかしら？」（18行目）と妻が写真集をのぞき込む。ここで夫は写真のキャプションを手がかりに答えようとしている。「これ、昭和：：（0.1）4年の建築で焼けてね、25年に」（19行目）と写真1のキャプションを読み上げながら、その情報を伝えている。明確な情報提示をうけ、妻は「あ：：、そうか：：hun」（20行目）と相槌を打っている。その勢いで夫は、「ほんで、いっぺん建てはってんけど、また↑それ52年には（2.0）な」（21行目）と、市役所が焼失したあと再び同じ場所に庁舎が建てられたこと、そして昭和52年に移転したことを続けざまに説明している。妻は、自分の知識と照合させながら、「うん、向こうに行ったわけやね、大宮の方へね、狭くなったし」（22行目）と夫の情報を補足しつつ市役所の移転について述べている。

その後、夫は写真4を指差しながら、「それで、これこれ」（23行目）と妻に視線を促す。すると、妻は「うん°、焼失前の：これ、木造やってんやね」（24行目）と反応し、夫が言うように以前の建物が木造であったことを写真4で確認している。

さらに、妻は26行目で「今、図書館になってる。中央公民館（.）中央じゃないのか。あれは」と、「今」という言葉を用いながら、市庁舎の跡地が現在図書館になっていることを確認している。その後の「あれは：：東、（中心街？）、寺林」（27行目）という夫の発言は、「今、図書館になってる」（26行目）という妻の発言をうけて、その地域が東寺林という場所であることを補って述べるものである。

そして、妻は写真4のキャプションを読みながら、人口増加にともなう市庁舎の建設について「う：ん、そうか°そうか（.）hu↑hun°、これ、できたんやね。奈良市も狭かったんやね。学園前の方も人口が増えてきたからね」（28行目）と、さらに話を進める。それをうけて夫は「昔は人口6万ほどや

ってん」(29行目)と、「昔」という言葉を使いながらある時期の奈良市の人口について言及している。

また面白いことに、この一連の会話の中で、二人は写真3について視界には入っているものの指を差したり凝視するということはない。写真3は、コミュニティセンター（兼中央図書館）として現在使われている建物の写真である。二人は、現在の様子について話題にあげながらも、この場面ではその関心が主に過去の古い建物の写真にあったことがここから伺える。

3.3 市役所庁舎の焼失について二人の意見が一致しない場面

それまで二人は市役所が火事で焼失したこと、人口が増えて移転したと、旧市役所の跡地には別の施設が建設されていることなどを話していた。ところが、妻が写真5のキャプションを読みながら、それが明治期の市役所であることに気づく。そこから二人の間で意見の相違が生じてくる。

- 30 0:18:34 妻 : °hun°, これやって、明治期の奈良市役所って書いてあるよ。
- 31 0:18:37 夫 : それが、[焼けて、焼けてしもてんや。(写真5を指差す)]
- 32 0:18:37 妻 : [明治:]
- 33 0:18:39 妻 : >↑これでしょ、焼けたんは。<((写真4を指差す))
- 34 0:18:40 夫 : >違うの、これ((写真5))が焼けて木造になったの<
- 35 0:18:40 妻 : う↑::ん、[これ焼けたて書いてる=
- 36 0:18:40 夫 : [((写真1))これ、これは、20,20
(写真5を指差した後、1を指差す)]
- 37 0:18:45 妻 : =>これ焼けたって書いてる。<昭和初期に= ((写真4を指差す))
- 38 0:18:50 夫 : [あ:::ほんと:::]

- 39 0:18:50 妻 : = [°これ, 何て書いてあるんかな°
40 0:18:50 夫 : これ [4年 [えっと
((写真4と写真1を見比べる))



夫：それが，「焼けて，焼けてしもてんや．

妻：「明治

妻：これでしょ，焼けたんは．

夫：違うの，これが焼けて木造になったの

図7 31行目の場面

30行目から40行目はこの夫婦の会話において，二人の意見が一致しないというやりとりが続く場面である。

30行目で「これやって，明治期の奈良市役所って書いてあるよ」と妻が注目した「明治期の奈良市役所庁舎」（写真5）の写真に対して，夫は「それが焼けたのだ」と誤った発言と指差しをしている。実際に焼失したのは，その後建設された建物（写真4）である。これに対して，妻はわずかに「明治：：」（32行目）と写真5のキャプションを読み上げたあと，「↑これでしょ，焼けたんは」（33行目）と写真4を指差し，夫の発話と指差しを修復（repair）している。

これは明らかに、会話上のトラブルが起きている場面である。会話におけるトラブルとは、「言い間違ったり、相手の言ったことを聞き逃したり、発言の意味を誤解したりされたり」するような経験を指している(前田・水川・岡田編 2007:140)。その意味で、現実の会話は様々な「トラブル」に満ちている。と同時に、私たちは会話のなかで、何がトラブルなのかを特定し、修復を行いながら、元の会話の流れに戻るよう、修復の工程を実践している。「修復を行うということは、それが『間違い』であるか否かにかかわらず、その会話のなかでは修復されるべきものであるという理解を示すことになる」のである(前田・水川・岡田編 2007:141)。

一般に、会話においてトラブルが起こった場合は、そのトラブルとなった発言をした本人に優先的に修復が委ねられる(トラブルの自己修復の優先性)。しかし、この場面においては、他者が「修復を開始」し、他者が「修復の操作」を行う、「他者修復」のケースとなっている。写真5のキャプションを読み上げながら述べた「[明治:]」(32行目)という妻の発話が「修復の開始」となり、その直前の夫の発話と指差しが修復されるべきものとして扱われる。そして、夫自身が「修復の操作」を行うことなく、妻が「↑これでしょ、焼けたんは」(33行目)とすかさず写真4を指差しながら発話したことにより、「修復の操作」が他者によって行われたといえる。

34行目以降は、写真に関する認識の齟齬をめぐる行われる二人のやりとりである。妻は写真のキャプションから「焼けたのは写真4の建物だ」と正確な情報を読み取っている。そして、それを夫に伝えることもできたはずだが、妻はそうしていない。単に「↑これでしょ、焼けたんは」と述べるに留めている(33行目)。しかし、34行目で夫が「違うの、これが焼けて木造になったの」とさらに主張するので、35行目「↑う：：ん、これ焼けたて書いてる」、37行目「これ焼けたって書いてる。昭和初期に」とその根拠をキャプションによって示し、妻が誤りを正している。31行目に行われた夫の発話と指差しに対して、見過ごすことができない会話上のトラブルとして妻はそれを取り扱い、32行から33行目にかけて修復の作業を行った。だが、夫自身がその発話と指差しが修復されるべき会話におけるトラブルの原因となって

いるのかをこの時点で了解していないことから、34行目の強い主張につながったと考えられる。

注目すべき点は、34行目で夫が「焼けて木造になった」と発言していることではないだろうか。夫はそれ以前の会話において「市庁舎は一度、木造であり、それが焼けてしまった」「昭和4年建築の建物が焼けて25年に立て直された」という主旨の発言をしている（14行目、19行目）。これは、34行目の「焼けたのは明治期の建物で、その後に木造の市庁舎が建てられた」という内容の発言とは食い違っている。この矛盾は一体何だろうか。写真1と写真4はそれぞれ違う時期の市庁舎を写したものであるが、とてもよく似ている。さらに、夫は妻に修復された後の40行目で写真1と写真4を見比べている。ここから2つの矛盾の理由が推測できると考える。①夫は妻同様に写真に添えられたキャプションを読んではいたが、彼はキャプションをただ読み上げていただけだった、②夫は、1と4の写真の建物は同一のものだと思っていた、という2点である。

また、夫は妻が33行目で誤りを指摘したにもかかわらず、36行目では「これ、これは、20,20」と2度にわたって発言を続けようとしている。しかし、この彼の発話は、35行目の「これ焼けたて書いてる」という妻の同時発話に遮られ、37行目でさらに同じ発言を重ねられることによって中断させられている。ここでは、妻は写真のキャプションから正確な知識を得ているために、今まで「知識の提供者」という立場から優先的に発言していた夫を一時的に解任した形となっている。その後の38行目「あ：：：ほんと：：：」の夫の発言から、彼の誤った発言と指差しが自身によってようやく了解されたことがわかるが、この38行目の発言も妻の39行目「これ、何て書いてあるんかしら」という、次のテーマに会話に移っていく言葉に重ねられてしまっている。その上、39行目の妻の発言は38行目の直後に発せられている。このことから、35行目から40行目まで、「夫が『知識の提供者』という立場から解かれている状況」が続いていることがわかる。

37 0:18:45 妻 : =>これ焼けたって書いてる、<昭和初期に＝
(写真4を指差す)

39 0:18:50 妻 : = 「°これ、何て書いてあるんかな°」

40 0:18:50 夫 : これ [4年 [えっと
(〔写真4と写真1を見比べる〕)

41 0:18:50 妻 : [これは、東寺林。[これもあったんやね。
これ川になってるよ、ここ。(写真5に写っている川を指差す))

42 0:18:50 夫 : ↑川, ↑川 ((写真5を見る))

43 0:18:51 妻：「堀になっているね（写真5を指差す）」

44 0 : 18 : 51 夫 : 「↑川流れて、

45 0 : 18 : 52 妻 : うん.

46 0:18:53 夫 : それが:(0.2) 猿沢池の横の川に, 猿沢池の横
流れてる
[今の↑交番の横=

47 0 : 19 : 58 妻 : 「う : ん あ :

48 0:19:00 夫 : =だから、昔は↑川やったんや。

49 0 : 19 : 01 妻 : うん, あ : :

50 0 : 19 : 03 夫 : 今でも残ってるがな.

51 0 : 19 : 04 妻 : あ : : =

52 0:19:05 夫 : =痕跡あるがな. 川ある.

53 0:19:07 妻 : ふ::ん=

54 0:19:08 夫 : =猿沢池の方ぐるっとまわってる。

55 0:19:08 妻 : あ::はあ::はあ::はあ::

写真鑑賞場面における相互行為分析

- 56 0:19:09 夫 : =それで、奈良市や。中にはあってたんや。
57 0:19:11 妻 : あ：なるほどね、そうか、違うわね、[同じとこと
違うわね。
58 0:19:12 夫 : [そうそう。
59 0:19:16 妻 : ° ふ：：↑ん°
60 0:19:17 夫 : だから、その源流は：：↑ホテルの横の川(側?)
よ。
61 0:19:20 妻 : あ：そう、そうやね。[ふ：：ん
62 0:19:22 夫 : [それが、だ：っとまわっ
てきて、んであれ
63 0:19:24 妻 : 今も流れてるもんね=
64 0:19:25 夫 : =そうそう。
65 0:19:26 妻 : ≪ページをめくる≫
66 0:19:27 夫 : huhuhu (3.0) あ、中央図書館。
67 0:19:30 妻 : 中央図書館。

注目すべきは、41行目以降の会話の流れであろう。前述したように、39行目の妻による発話「これ、何て書いてあるんかしら」や、41行目の「これは、東寺林。これもあったんやね。これ川になってるよ、ここ」は、38行目から40行目の「あ：：：ほんと：：：」「これ4年、えっと」と夫が写真4と写真1を見比べながら言いよんどんでいるところに間髪を入れずに発せられている。このとき、妻はすでに写真5に視線を移し、写真に写っている川の存在を指摘している。写真5には、庁舎手前に川が流れ堀になっている様子が映し出されており、キャプションにも「菩提川が流れていた」と記されている。妻によって「川」の存在が指摘されると、以後、二人の会話は川の流域やその周辺の目標物といった地理情報へと移り変わっている。

ここから以下の2つのことが読み取れるのではないだろうか。①夫の間違いを追求せずに、別の話題を振ることでトラブルの長期化を回避する計らい。②妻は焼失した建物が写真4であると正確な情報をキャプションから得

ているので、夫の誤りや、その訂正、彼の言い分を気にすることなく次の写真へと視線を転じ、鑑賞行為を継続することを優先した。この39行目と41行目の発話にどのような意図があるのかわからない。だが、それ以降の会話で、妻と夫の間に起きた市庁舎焼失に関するトラブルが問題視されなくなっている点を考えると、妻によって発せられたこれらの発話が、話題の転換となったことは明らかである。

それまで焼失した市庁舎を識別するために写真4と写真1を見ていた夫は、41行目の「これ川になっているよ、ここ」という妻の発言に反応し、写真5に視線を移している。そして、夫は「↑川、↑川」と言い、妻が「堀になっているね」と写真5の川を指差しながら確認する発話と同時に、「↑川流れて」と川に関する話を始める（42行目から44行目）。

写真4のキャプションにもあるように、明治期に奈良市役所前に流れていた「菩提川」は、昭和4年に市庁舎が建設された際、暗渠とされて道路の一部になった。そのため、現在その周辺では、地下に川が流れていることに気づきにくい状況にある。「これ川になっているよ、ここ」という妻の発言は、そのような市庁舎跡地の現在の状況と昔の写真の違いに気づき述べられたものであると考えられる（41行目）。

他方、夫は暗渠となっているその川が存在を知っていることから、それが現在流れている川のどこにつながっているのか妻に説明し始める（46行目以降）。奈良の旧市街地には、猿沢池という興福寺五重の塔を望むことのできるため池がある。46行目の「それが：（0.2）猿沢池の横の川に、猿沢池の横流れてる。今の↑交番の横」という夫の発話は、猿沢池周辺を流れている川が市庁舎跡周辺の暗渠となっている川とつながっていることを妻に説明しようとするものである。このとき、彼は腕をぐると回しながら話している。

しかし、夫の説明に対して妻は「う：ん あ：」といった曖昧な相槌を返し、承認を遅延している（47行目）。即座に今と昔の地理が合致せず、曖昧な返事（49行目、51行目、53行目）を続ける妻に対し、夫は48行目「だから、昔は↑川やったんや」、50行目「今でも残ってるがな」、52行目「痕跡あるがな。川ある」と、立て続けに想起を促し承認を要請している。54行目の

「猿沢池の方ぐるとまわってる」と再び腕を大きく回しながら夫が述べたところで、妻がようやく「あ：はあ：はあ：はあ：」と承認する（55行目）。このとき妻が夫の説明に納得したと観察できるのは、57行目の「あ：なるほどね、そうか、違うわね、同じとこと違うわね」という発話によって裏づけられる。

夫はその後も、60行目「だから、その源流は：↑ホテルの横の川（側？）よ」、62行目「それが、だ：っとまわってきて、んであれ」と、川の流れを説明するために「猿沢池」の横に流れる川に加え、さらに「ホテル」の横に流れている川を話題としてあげていく。それに応じるかたちで、妻も61行目「あ：そう、そうやね」、63行目「今も流れてるもんね」と川に関する現在の知識と照合しながら夫の説明に同意している。

3.5 相互行為全体にわたる考察

今回の相互行為場面では、夫は「昔」の奈良のことを「より知っている者」、妻は「より知らない者」という対比でその立場が表示されている。

ここでは、知っている／知らないという知識の非対称性だけでなく、知識へのアクセスの優先性に差があることから、情報の授受に一定の傾向が見られた。この場合、夫は長くその地域に住んでいるという経年と経験の豊富さから、「昔」についての情報を「知っている」という立場に置かれ、「昔」の知識へのアクセスの優先性が妻より高い状態にある。そして、夫は「昔」のことを説明する権限が付与され、妻はその情報を受け取りながら自分の知識と照合し応答するという参与の構図が、会話を通してできあがっている。これは、知識についての社会的な配置や知識についての規範的な期待といったものに目配りされながら、両者のあいだで情報の授受が行われていることと関連する。いいかえれば、相互行為を通して、夫は「昔」の様子について説明する者＝「知識の提供者」、妻はそれを聞く者＝「聞き手」という位置取りが会話全体を通して形成されるのである。

そこで、写真という外部から提供される物理的な情報源を介した相互行為として分析を重ね、次の5つのことを指摘する。ここでは、写真鑑賞をしな

がら表現される「昔」と「今」という言葉が鍵となっている。

①夫は写真のキャプション情報を参照しながらも、自らの「昔」の記憶情報を頼りに写真に関する説明やエピソードを妻に提示している。たとえば、04行目「昔の鹿、痩せとってんで」、14行目「いっぺん、↑木造↓やってん、で、あれ火事で↑焼けちゃってんや」、29行目「昔は人口6万ほどやってん」、46行目から48行目「猿沢池の横の川に、猿沢池の横流れてる」「だから、昔は↑川やったんや」という発話がこれにあたる。写真やキャプション自体にはその状況が投影されていないのだが、写真から想起される自らの記憶にもとづいて説明が行われている。

②一方、妻は夫の説明に対して聞き手としての役回りを担いながらも、写真のキャプションを順に追って読み進め、とりわけ目の前にある写真と「今」の状況の差異について言及する場面が多々見られる。たとえば、01行目から03行目「奈良公園の鹿、鹿は同じやね」「今も昔もね!」、26行目「今、図書館になってる」、57行目「あ：なるほどね、そうか、違うわね、同じとこと違うわね」、63行目「今も流れてるもんね」という発話である。ただし、夫が提供する「昔」の知識をすべてそのまま承認しているというわけではない。その真／偽を「今」の自分の知識や写真のキャプションを参照することによって妻は判別していた。

③夫は「昔」の状況について説明しながらも、「今」の状況について妻に説明する場面がある。とくに、会話の後半にみられる暗渠とされた川の流域を説明する場面では、「今」の地理情報を参照しながら妻に想起させようとしている(50行目から54行目)。これは承認を遅延している妻に対して、「今」の情報を提示することによって承認を可能にする試みである。それは「今」のことであれば妻も知っているという想定の下に行われている。

④逆に、妻は「今」の状況を基準としながらも、写真を見ながら「昔」の状況を夫に確認するという行為を繰り返している。たとえば、05行目の「ふ：：ん、ほんと、痩せてた↑ん昔の鹿は」という発話は、「昔」の鹿が「今」と違って痩せていたのかということを夫に確認している。いわば、妻はここで「昔」の鹿の状態に対して知識が不確かであることを表示している。

そのため、「昔」のことについて「より知っている」夫にその状態を確認しているのである。また、24行目の「焼失前の：これ、木造やってんやね」という発言も、焼失前の市庁舎が木造であったということを夫に確認している場面である。さらに、市庁舎焼失をめぐるやりとりを終了させた「これもあったんやね。これ川になってるよ、ここ」という41行目の発話についても、同様の指摘ができる。

先に述べたように、市庁舎の焼失をめぐって二人の意見が一致しないというやりとりにおいて、夫は自身の誤りについて妻の指摘によって確認した。ただし、妻は、最終的にその誤りを夫自身が確認あるいは承認するのを待たずに写真の鑑賞行為を再開している。その間わずかであるが、夫は写真を見比べながら逡巡している。その後、妻の「これ川になってるよ、ここ」という発話により、市庁舎から近隣を流れる川の話へと話題の転換が起きた（41行目）。だが、ここでは、妻が夫に対して「昔」の状況を夫に確認している場面として捉えることも可能である。つまり、妻が夫に知識の提供を要請したことにより、意見の不一致から始まった議論によって中断された「説明をする者＝知識の提供者」「それを聞く者＝聞き手」という参与の構図は、話題が転換しても、滞りなく再開されたのである（42行目以降）。

⑤最後に、写真を介した相互行為と発話をする権限の関係について述べたい。今回の分析では、夫妻の会話のなかに見られる「説明をする者＝知識の提供者」「それを聞く者＝聞き手」という参与の構図が明らかとなった。それは、夫が「昔」について話す権限が付与され、妻が聞き役に回って会話が進行しているという見方であった。

しかし、その一方で、妻が写真を鑑賞するペース（進行度、テンポ）によって夫の発話が制限されていることが明らかとなった。今回素材として利用した写真集は、B4サイズで右開きの体裁をしている。そのため、夫に対して左側に座っている妻が、左から右へと写真集のページをめくっている。夫が手を伸ばしてページをめくるということも可能であろうが、写真集のサイズが大きいことや二人で写真集を眺めているときに視線を横切り左側のページをめくるということは、円滑な相互行為を阻害する要因となりかねない。

ここでポイントとなるのは、「写真集のページをめくる」という行為が、「見るべき対象を変える」という行為であることに気づくことである。二人は見開きページにある数枚の写真に視線を移しつつ、時折、指を差しながら写真を鑑賞していく。そしてその間、ある一定のペースでページをめくるという行為を挟んでいる。妻が左端のページをめくるタイミングは、話題の転換の契機となっていることを考えると、この場合、妻が夫の発話の権限を意図せず統制していると捉えることができよう。

4 おわりに

本稿では、『奈良市今昔写真集』を題材に、写真を介した夫婦のコミュニケーションについて検討した。写真集に収集された写真群は、鑑賞者に地域に関する記憶を思い起こさせる機能を果たしていた。写真のシークエンスから語りだされたことがらは、単に個別に映し出された被写体のみならず、写真に映し出されていない出来事や経験についても及んでいた。掲載されている写真は、時代を越えて地域で暮らす人びとが様々な関心に基づき残してきた記録である。集められた歴史写真を眺めることは、自分の視点とは異なる視点で切り取られた過去の写真を眼差すことである。そのため、複数のメンバーによる写真の鑑賞は、会話を通して視点の転換が頻繁に引き起こる。今回の写真鑑賞も、そうした会話を通して、映し出された写真にある一定の位置を与える作業となっていた。

分析で明らかになったことをまとめると、次のとおりである。夫＝「昔」について説明する者＝「知識の提供者」と、妻＝それを聞く者＝「聞き手」という発話における位置取りは、必ずしも能動／受動の関係ではなかった。「昔」について夫に確認するという妻の行為が、夫を「知識の提供者」として配役し、夫はその妻の要請に応えるかたちで「昔」の知識を提供していた。一方で夫は、「聞き手」である妻の理解や承認を促すために、「今」に関する知識を織り交ぜる。妻は、夫によって提示された知識と自分の知識を照合させながら、応答していた。いいかえれば、双方のそのような要請／応答のふ

るまいが、夫＝「昔」について説明する者＝「知識の提供者」と、妻＝それを聞く者＝「聞き手」という発話における位置取りを定式化したのである。

そのため、トラブルが起きながらも、夫婦が写真を見ながら「終始、和やかに会話を進めている」と調査者が観察できたのは、このような相互の要請／応答が組織されていたからではないかと考える。市役所のページを見終わり次のページへとめくられた後に、「huhuhu」（66行目）と夫は小さく笑うのだが、会話をしながら二人で写真鑑賞を愉しみ、ページが変わる合間に一息ついている様子が、この笑いから軽やかに伝わってくるのである。

【注】

- 1) 「あとがき」にあるように、写真集は「おもに失われてしまった昭和の風景や人びとの暮らしを選び、現在の状況と比較することにより、当時をご存知ない方たちにもその変化の激しさと、ふるさとの風土を生み出した先人の営みを感じていただけるように構成」されている（安彦監修 2008：150）。
- 2) 本稿への写真集の一部掲載は、発行者に確認のうえ承諾済みである。
- 3) 本稿では発話のやりとりの断片を提示するにあたり、次の記号を用いる。

・	下降調のイントネーション
？	上昇調のイントネーション
，	平らなイントネーション
！	生きいきとした調子
↑	記号直後の音調が上がっている
↓	記号直前の音調が下がっている
> <	2つの記号で囲まれた発話の部分の速度が速い
<	急いで発話が始まっている状態
° °	2つの記号で囲まれた発話の音が周りより静かな状態
：	音が伸ばされている状態
[2人以上の参加者の発話の重なりが始まる箇所
]	2人以上の参加者の発話の重なりが終わる箇所
=	言葉と言葉、発話と発話が途切れなくつながっている箇所
(0.1)	0.1秒単位で数えた沈黙の長さ
(.)	非常に短い間合い
hah,huh	笑い
hun	呼気音

[文献]

安彦勘吾監修, 2008,『奈良市今昔写真集』樹林舎.

Anderson, Benedict, 1991, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Revised Edition, London: Verso.(=1997,白石さや・白石隆訳『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行 増補版』NTT出版.)

Barthes, Roland, 1980, *La Chambre Claire: Note sur la Photographie*, Gallimard, Paris: Seuil.(=1985,花輪光訳『明るい部屋——写真についての覚書』みすず書房.)

Benjamin, Walter 1935–36, “Das Kunstwerk im Zeitalter Seiner Technischen Reproduzierbarkeit”.(=1995,久保哲司訳「複製技術の時代における芸術作品」浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション 1 近代の意味』筑摩書房.)

Benjamin, Walter 1931, “Kleine Geschichte der Photographie” (=1998,久保哲司編訳「写真小史」『図説写真小史』筑摩書房.)

Bourdieu, Pierre, 1965, *Un Art Moyen: Essai sur les Usages Sociaux de la Photographie*, Paris: Editions de Minuit.(=1990,山縣熙・山縣直子訳『写真論——その社会的効用』法政大学出版.)

Davis, Fred, 1979, *Yearning for Yesterday: A Sociology of Nostalgia*, The Free Press.(=1990,間場寿一・荻野美穂・細辻恵子訳『ノスタルジアの社会学』世界思想社.)

Erving, Goffman, 1979, *Gender advertisements*, London: Macmillan Press.

Harper, Douglas, 1988, “Visual Sociology: Expanding Sociological Vision”, *The American Sociologist*, Spring: 54–70.

Harper, Douglas, 2000, “Reimaging Visual Methods: Galileo to Neuromancer”, Norman K. Denzin, and Yvonna S. Lincoln, eds., *Handbook of Qualitative Research*, London: Sage Publications, 717–32.

小林美香, 2005,『写真をく読む>視点』青弓社.

串田秀也, 1999,「助け舟とお節介」好井裕明・山田富秋・西阪仰編『会話分析への招待』世界思想社.

前田泰樹・水川善文・岡田光弘編, 2007,『エスノメソドロジー——人びとの実践から学ぶ』新曜社.

中塚朋子, 2005 年, 「ジェンダー・アイデンティティと写真をめぐる物語論的考察——虎井まさ衛『男の戸籍をください』を事例として」『現代社会理論研究』第 15 号, 現代社会理論研究会, 336–348.

- Plummer, Ken, 1983, *Documents of Life: an Introduction to the Problems and Literature of a Humanistic Method*, London: George Allen & Unwin.(=1991, 原田勝弘・川合隆男・下田平裕身監訳 『生活記録の社会学——方法としての生活史研究案内』光生館.); 2001, *Documents of Life 2: an Invitation to a Critical Humanism*, London: Sage Publications.
- Sontag, Susan, 1977, *On Photography*, New York: Farrar, Straus and Giroux, Inc. (=1979, 近藤 耕人訳『写真論』晶文社.)
- 竹内彰啓, 1996, 「映像社会学の歴史的展望——アメリカの事例」『人間情報学研究』, 第1号, 東北学院大学人間情報学研究所, 33-52.
- 竹内彰啓, 1997, 「映像社会学の教育方法と課題」『人間情報学研究』, 第2号, 東北学院大学人間情報学研究所, 15-28.
- 角田隆一, 2002, 「家族写真の社会学的一考察——『記憶』からみる写真実践とその社会的機能」『現代社会理論研究』第12号, 現代社会理論研究会, 50-68.
- 内田隆三編, 1998, 『情報社会の文化2——イメージのなかの社会』, 東京大学出版会.
- 山崎敬一編, 2004, 『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣.
- 安川一, 2002, 『視覚メディアにおけるジェンダー・ディスプレイのミクロ社会的分析』(1999年度～2001年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書).
- 安川一, 2005, 『身体の視覚的編制——視角経験と社会的世界の再帰的編制をめぐるミクロ社会学的研究』(2003年度～2004年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書).
- 好井裕明・串田秀也編, 2010, 『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』世界思想社.
- 亘明志, 2003, 「映像と身体——見ることのパラドックス」見田宗介・内田隆三・市野川容孝編『＜身体＞は何を語るのか——20世紀を考える(Ⅱ)』新世社.